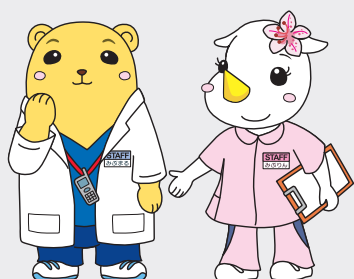


京都市立病院

KYOTO CITY HOSPITAL

ガイドンス

2023



みぶまる

みぶりん

京都市立病院公式キャラクター



— 京都市立病院機構理念 —

京都市立病院機構は

● 市民のいのちと健康を守ります

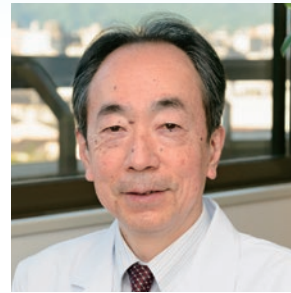
● 患者中心の最適な医療を提供します

● 地域と一体となって健康長寿の
まちづくりに貢献します

「京都市立病院憲章」

- 1 質の高い安全な医療を提供するとともに、地域の医療水準の向上に貢献します。
- 2 患者の権利と尊厳を尊重し、心のこもった医療を提供します。
- 3 救急や災害時における地域に必要な医療を提供するとともに、地域住民の健康の維持・増進に貢献します。
- 4 病院運営に参画する事業者等とのパートナーシップを強め、健全な病院経営に努めます。
- 5 職員の育成に努め、職員が自信と誇りを持ち、全力で医療に従事できる職場環境を作ります。

院長挨拶



令和6年度研修医募集によせて

京都市立病院は、昭和43年に日本で初めて臨床研修医を採用した病院で、国内で最も長い臨床研修の歴史を持っています。現在は37診療科を備え、幅広い分野の疾患に対応していますが、基本的には高度急性期医療を推進しており、充実した地域医療支援機能も持ち合わせています。また、当院は自治体病院として、感染症医療、救急医療、小児・周産期医療などの政策医療にもしっかり取り組み、職員一同、常に患者さん中心の、安心して安全な医療の提供を心がけています。

当院の臨床研修教育指導体制ですが、京都大学、京都府立医科大学と滋賀医科大学の関係病院として、優秀な指導医の派遣を受けています。2年間の初期臨床研修期間に、医療技術・知識の習得はもちろんのこと、患者さんに寄り添い、その立場に立って考え、計画を立て、実践し、検証することができる医師を育成することを目標としています。そして、3年目以降の後期研修(専攻医研修)では、内科、麻酔科の2診療科においては独自の研修プログラムを持っており、専門性を追求した研修が受けられます。もちろん他の診療科についても、京都大学、京都府立医科大学を基幹病院とした研修プログラムを備えており、専門医資格の取得に向けて充実した内容となっています。

さて、新型コロナウイルスのパンデミックは、発生後3年が経過しました。今まで当院は、第二種感染症指定医療機関として、1,200名以上の新型コロナウイルス感染症の入院患者を受け入れてきました。この間、研修を受けて頂いている研修医には、例年にはない緊張を強いることになりましたが、それはまた貴重な経験であったと思いますし、各診療科の研修内容についても、充実したものであったと自負しております。

皆さんをお迎えする頃の新型コロナの状況は予測が難しく、まだまだ予断を許しませんが、どのような状況にあっても医療人としての高い意識と意欲を持ち続けることが必要と考えています。

京都市立病院は、全職員が一丸となって、患者さん一人一人に対し、より心のこもった医療を提供していきたいと思っています。目標に向かって協働していただける皆さんの応募をお待ちしています。

令和5年6月
京都市立病院
院長 黒田啓史

もくじ

病院の概要

- 06 病院沿革
- 08 病院組織図
- 10 京都市立病院の概要
- 11 病院機能等
- 12 学会施設認定一覧
- 14 診療科定例カンファレンス一覧表

診療科の紹介

- 16 周術期統括部
- 18 総合内科
- 19 呼吸器内科
- 20 消化器内科
- 21 腫瘍内科
- 22 循環器内科
- 23 腎臓内科
- 24 脳神経内科
- 25 血液内科
- 26 内分泌内科
- 27 糖尿病代謝内科
- 28 感染症科
- 29 精神神経科
- 30 小児科
- 31 総合外科(消化器外科+小児外科)
- 32 乳腺外科
- 33 呼吸器外科
- 34 脳神経外科
- 35 整形外科
- 36 皮膚科
- 37 泌尿器科
- 38 産婦人科
- 39 眼科
- 40 耳鼻いんこう科
- 41 歯科口腔外科
- 42 放射線診断科・IVR科
- 43 放射線治療科
- 44 病理診断科
- 45 救急科
- 46 緩和ケア科





病院沿革

明治15年	上京公立避病院（伝染病院）開設
明治22年	上京公立避病院（伝染病院）を京都市聚楽病院と改称
大正04年	市立京都病院を設置
昭和23年	京都府中央病院が京都市中央市民病院（総合病院）に改組
昭和36年	市立京都病院改築
昭和40年	京都市中央市民病院と市立京都病院統合、京都市立病院開設 病床数519床：一般319床、伝染200床
昭和43年	臨床研修医を初めて採用（内科2名）
昭和46年	病床数を721床（一般521床、伝染200床）に増床
昭和47年	看護師北宿舎増築（定員64人）
昭和51年	看護師東宿舎増築（定員63人）
昭和52年	院内保育所（青いとり保育園）開園
昭和52年	北病棟開床
昭和53年	病床数700床（一般450床、結核50床、伝染200床）に変更
昭和55年	RI棟竣工
昭和57年	「京都市立病院紀要」第1号を創刊
昭和58年	ボイラー棟竣工
平成04年	新棟竣工 病床数616床（一般566床、結核12床、伝染38床） 総合情報システム（オーダリング）が稼動開始
平成06年	駐車場整備工事完了
平成08年	病床数608床（一般558床、結核12床、伝染38床）に変更
平成08年	骨髄採取・移植施設（小児科）として認定
平成09年	地域災害医療センター（災害拠点病院）として指定
平成09年	倫理委員会設置
平成10年	「京都市立病院憲章」を制定 臓器提供施設に指定
平成11年	病床数586床（一般566床、結核12床、伝染8床）に変更 第二種感染症指定医療機関に指定 総合情報システムを更新



平成15年	臍帯血バンク採取施設 地域医療連携室開設 女性総合外来診察開始 SARS専用診察室を新設
平成16年	新医師臨床研修制度の導入により、マッチング方式で参加 研修医を採用（16名） 外来患者に対する院外処方箋を発行開始 専任リスクマネジャーを配置 「京都市立病院診療概要」第1号を創刊
平成17年	「京都市立病院整備基本計画」を策定 財団法人日本医療機能評価機構の評価認定
平成18年	院内PHSシステム導入
平成19年	地域がん診療連携拠点病院の指定
平成20年	電子カルテシステムを導入・稼動
平成21年	病床数548床（一般528床、結核12床、感染症8床）に変更 DPC制度導入 地域医療支援病院の指定を受ける
平成22年	財団法人日本医療機能評価機構の評価認定（更新）
平成23年	地方独立行政法人京都市立病院機構設立
平成25年	新館（現北館）開院
平成27年	公益財団法人日本医療機能評価機構の評価認定（更新） 患者送迎バス運行開始
平成28年	腫瘍内科を開設 KES・環境マネジメントシステム・スタンダード（ステップ1）の認証を取得
平成30年	「がんゲノム医療連携病院」の指定を受ける
令和 元年	患者支援センターを開設
令和02年	緩和ケア病棟を開設 公益財団法人日本医療機能評価機構の評価認定（3rdG:Ver.2.0） 新型コロナウイルス陽性患者の受入れを開始 新型コロナウイルスに対応するため、DMAT隊員を横浜のダイヤモンドプリンセス号へ派遣 新型コロナウイルス対策本部設置
令和05年	がん医療連携センターを開設



病院組織図(令和5年4月1日現在)

地方独立行政法人京都市立病院機構

理事長 黒田 啓史（市立病院長兼職）

経営企画局

京都市立病院

院長 黒田 啓史（理事長）

副院長 清水 恒広（理事）（統括担当副院長）（医療安全推進室長、感染管理センター部長事務取扱）

副院長 岡野 創造（理事）（プロジェクト担当副院長）

副院長 半場 江利子（理事）（市立病院看護部長事務取扱）

副院長補佐 由良 博（地域包括ケア推進担当）（京北病院院長代行・医療政策監兼職）

事務局

事務局長 松本 重雄（理事）（経営企画局長兼職）

経営担当部長/管理担当部長 長谷川 一樹（経営企画局次長兼職）

市立病院・京北病院連携担当部長 大島 伸二（京北病院事務管理者・統括事務長兼職）

経営企画担当課長 菱田 栄造（経営企画課長兼職）

総務担当課長 久保 恵司

管理PFI担当課長 星野 和之

医事・業務担当課長 向井 敬治（医療情報部担当課長兼職）

課長補佐（医療情報部情報システム室室長補佐兼職）

（システム担当係長、医療情報部情報システム室担当係長事務取扱）

経営管理担当係長

経営企画担当係長

財務第一担当係長

財務第二担当係長

総務担当係長

職員担当係長

給与厚生担当係長

管理運営担当係長

施設担当係長

医事担当係長

システム担当係長

業務担当係長

健診センター担当係長

周術期統括部

周術期統括部長 角山 正博（手術センター部長、麻酔科部長、疼痛管理科部長事務取扱）

手術センター

手術センター部長（周術期統括部長 角山正博 事務取扱）

麻酔科

麻酔科部長（周術期統括部長 角山正博 事務取扱）

麻酔科担当部長 白神 豪太郎

疼痛管理科

疼痛管理科部長（周術期統括部長 角山正博 事務取扱）

集中治療科

集中治療科部長 下新原 直子

診療部

診療部統括部長 宮原 亮（入院業務改善担当、がん診療推進担当）

（呼吸器外科部長、形成外科部長、歯科口腔外科部長、がん医療連携センター長事務取扱）

診療部副統括部長 家原 典之（外来業務改善担当、教育研修担当）

（総合内科部長、腎臓内科部長、患者支援センター長、血液浄化センター部長、臨床工学科技師長兼職）

診療部副統括部長 小暮 彰典（保険診療適正化担当、救急・災害担当）

（糖尿病代謝内科部長、健診センター部長、医療情報部診療情報管理室長、栄養科部長兼職）

内科

総合内科部長（診療部副統括部長 家原典之 兼職）

アレルギー科

総合内科担当部長 島 正巳（地域連携室長、入院支援室長、相談支援室長兼職）

呼吸器内科

呼吸器内科部長 小熊 毅

消化器内科

消化器内科部長 山下 靖英（内視鏡センター部長兼職）

消化器内科担当部長（腫瘍内科担当部長 宮川昌巳 兼職）

肝臓内科部長 桐島 寿彦（腫瘍内科部長、外来化学療法センター部長 兼職）

腫瘍内科

腫瘍内科部長（肝臓内科部長 桐島寿彦 兼職）

腫瘍内科担当部長 宮川 昌巳（消化器内科担当部長、エコーセンター部長兼職）

循環器内科

循環器内科部長 岡田 隆

腎臓内科

腎臓内科部長（診療部副統括部長 家原典之 兼職）

脳神経内科

脳神経内科部長 中谷 嘉文（脳卒中センター部長兼職）

血液内科

血液内科部長 宮原 裕子

血液内科輸血・造血幹細胞移植科部長 伊藤 満（輸血療法センター部長兼職）

内分泌内科

内分泌内科部長 小松 弥郷

糖尿病代謝内科

糖尿病代謝内科部長（診療部副統括部長 小暮彰典 兼職）

感染症科

感染症科部長 栃谷 健太郎（感染管理センター副部長事務取扱）

精神神経科

精神神経科部長 石田 明史

小児科

小児科部長 石田 宏之

小児科血液部長 田村 真一

外科

総合外科部長 秦 浩一郎（小児外科部長兼職）

総合外科担当部長（医療情報統括部長 山本栄司 事務取扱）

消化器外科

消化器外科部長 松尾 宏一

消化器外科担当部長 上 和広

乳腺外科

乳腺外科部長 森口 喜生（遺伝診療部副部長事務取扱）

小児外科

小児外科部長（総合外科部長 秦浩一郎 兼職）

呼吸器外科

呼吸器外科部長（診療部統括部長 宮原亮 事務取扱）

脳神経外科

脳神経外科部長 地藤 純哉（脳卒中センター副部長事務取扱）

整形外科

整形外科部長 鹿江 寛（リウマチ科部長兼職）

整形外科人工関節部長 金 永優

脊椎外科部長 竹本 充

リウマチ科

リウマチ科部長（整形外科部長 鹿江寛 兼職）

リハビリテーション科

リハビリテーション科部長 多田 弘史

皮膚科

皮膚科部長 竹中 秀也

形成外科

形成外科部長（診療部統括部長 宮原亮 事務取扱）

泌尿器科

泌尿器科部長 清川 岳彦

産婦人科

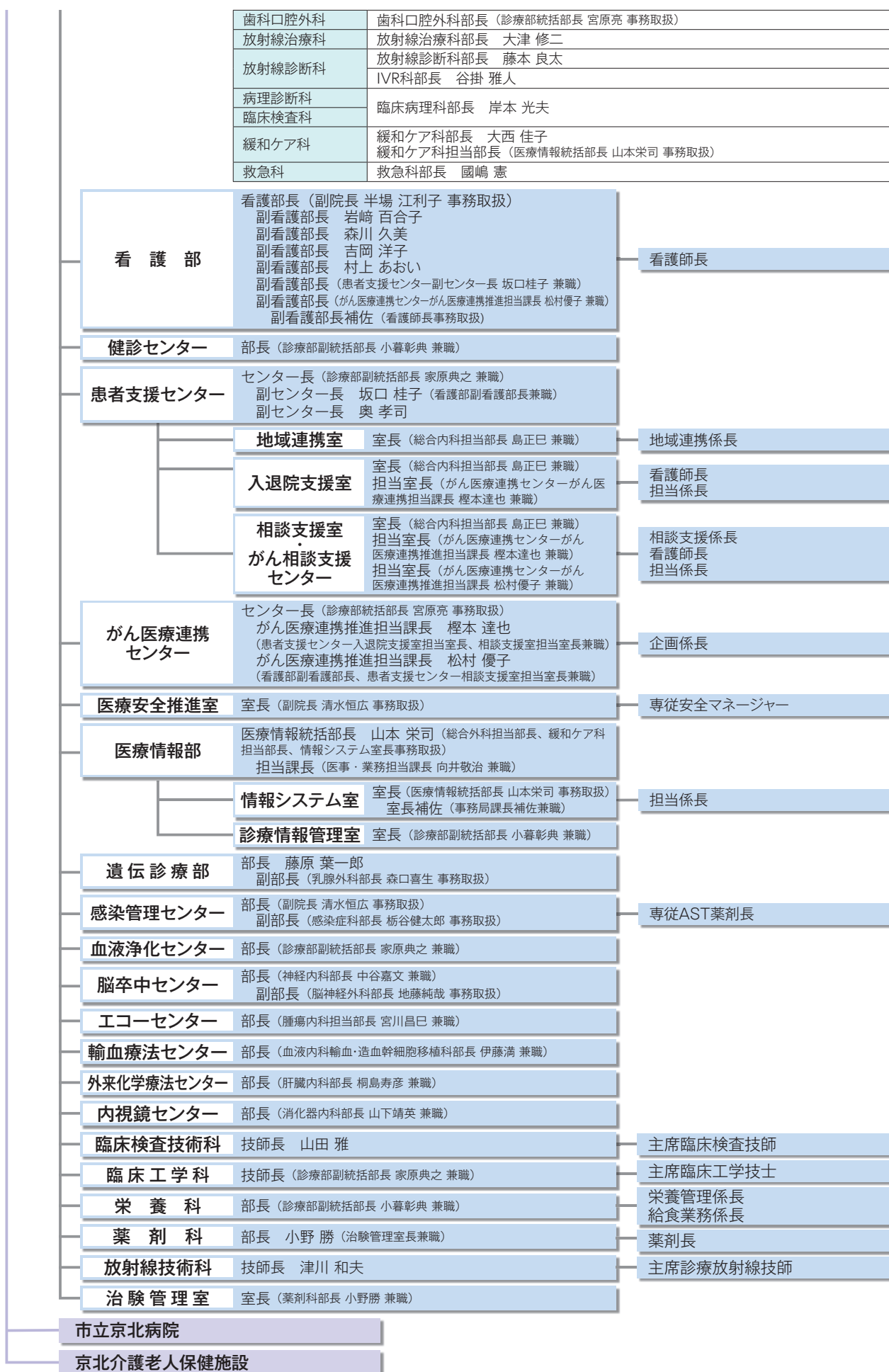
産婦人科部長 小芝 明美

眼科

眼科部長 鈴木 智

耳鼻いんこう科

耳鼻いんこう科部長 豊田 健一郎



京都市立病院の概要

名 称	京都市立病院
開設年月日	昭和40年12月1日（平成23年4月1日 地方独立行政法人京都市立病院機構設立）
病 床 数	548床（一般528床、結核12床、感染症8床）
病 院 種 類	一般病院
診 療 科 目 （医療法上）	● 内科、呼吸器内科、消化器内科、腫瘍内科、循環器内科、腎臓内科、脳神経内科、血液内科、内分泌内科、感染症内科、糖尿病代謝内科、アレルギー科、精神科、小児科 ● 外科、呼吸器外科、消化器外科、泌尿器科、乳腺外科、小児外科、整形外科、リウマチ科、脳神経外科、皮膚科、形成外科、産婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、リハビリテーション科 ● 放射線診断科、放射線治療科、病理診断科、臨床検査科、救急科、歯科口腔外科、麻酔科、緩和ケア内科
所 在 地	〒604-8845 京都市中京区壬生東高田町1番地の2 TEL 075(311)5311 FAX 075(321)6025
敷地面積／建物延床面積	34047.27平方メートル／50582平方メートル

主な機関指定

- 平成 7年 7月 エイズ治療拠点病院
- 平成 8年12月 骨髄採取・移植施設（小児科）
- 平成 9年 3月 地域災害医療センター（災害拠点病院）
- 平成10年 6月 臓器提供施設
- 平成11年 4月 第二種感染症指定医療機関
- 平成17年11月 日本病院機能評価機構認定病院
- 平成19年 1月 地域がん診療連携拠点病院
- 平成21年 9月 地域医療支援病院
- 平成22年 1月 日本病院機能評価機構認定病院（V6.0）
- 平成27年 1月 日本病院機能評価機構認定病院（3rdG:ver.1.0）
- 平成30年10月 がんゲノム医療連携病院
- 令和 2年 3月 日本病院機能評価機構認定病院（3rdG:ver.2.0）
- 令和 4年 4月 DPC特定病院群





病院機能等

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| ■ エイズ治療拠点病院 | ■ 年間新入院患者数 … 12,008人 (2022年度) |
| ■ 骨髄採取・移植施設 (小児科) | ■ 一日平均外来患者数 … 1,157人 (2022年度) |
| ■ 地域災害医療センター (災害拠点病院) | ■ 年間救急車搬入台数 … 6,423台 (2022年度) |
| ■ 第二種感染症指定医療機関 | ■ 病床稼働率 … 65.8% (2022年度) |
| ■ 日本病院機能評価機構認定病院 (3rdG:ver.20) | ■ 平均在院日数 … 9.9日 (2022年度) |
| ■ 地域がん診療連携拠点病院 | ■ 看護体制 … 7:1 |
| ■ 地域医療支援病院 | ■ 医師事務作業補助者 (ドクタークラーク) … 15:1 |

(2023.4.1現在)

学会施設認定一覧(令和5年4月1日現在)

診療科	学会認定
内科	日本内科学会認定医制度教育病院
腫瘍内科	日本臨床腫瘍学会認定研修連携施設 日本がん治療認定医機構認定研修施設
血液内科	日本血液学会認定血液研修施設・認定専門研修施設 非血縁者間骨髓採取認定施設・移植認定施設 非血縁者間末梢血幹細胞採取認定施設・移植認定施設 非血縁者間造血幹細胞移植認定診療科 JALSG(日本成人白血病治療共同研究グループ)参加施設
内分泌内科	日本内分泌学会内分泌代謝科専門医認定教育施設 日本高血圧学会専門医認定施設 腫瘍・免疫核医学研究会甲状腺癌外来アブレーション受け入れ可能施設
糖尿病・代謝内科	日本糖尿病学会認定教育施設 日本肥満学会認定肥満症専門病院 日本病態栄養学会病態栄養専門医研修認定施設
腎臓内科	日本腎臓学会研修施設 日本透析医学会専門医制度認定施設
脳神経内科	日本神経学会専門医制度教育施設 日本脳卒中学会認定研修教育病院 日本認知症学会教育施設
呼吸器内科	日本呼吸器学会認定施設 日本呼吸器内視鏡学会認定施設
消化器内科	日本消化器病学会専門医制度認定施設 日本肝臓学会認定施設 日本超音波医学会専門医研修施設
内視鏡センター	日本消化器内視鏡学会指導施設
循環器内科	日本循環器学会認定循環器専門医研修施設 日本心血管インターベンション治療学会研修関連施設 浅大腿動脈ステントグラフト実施基準管理委員会認定施設
小児科	日本小児科学会小児科専門医制度小児科専門医研修施設・研修支援施設 日本周産期・新生児医学会新生児認定施設 日本小児神経学会小児神経専門医制度研修施設 非血縁者間骨髓採取認定施設・移植認定施設 非血縁者間末梢血幹細胞採取認定施設・移植認定施設 非血縁者間造血幹細胞移植認定診療科 日本血液学会認定血液研修施設 日本小児科がん学会小児血液がん専門医研修施設
外科	日本外科学会外科専門医制度修練施設 日本消化器外科学会専門医修練施設
感染症内科	日本感染症学会認定研修施設

診療科	学会認定
整形外科	日本整形外科学会専門医制度研修施設 日本リウマチ学会教育施設 日本脊椎脊髄病学会認定施設椎間板酵素注入療法実施可能施設
脳神経外科	日本脳神経外科学会専門医指定研修施設 日本脳卒中学会認定研修教育病院
呼吸器外科	胸部外科教育施設協議会認定施設 呼吸器外科専門医合同委員会専門研修連携施設
皮膚科	日本皮膚科学会認定専門医研修施設
泌尿器科	日本泌尿器科学会専門医教育施設
産婦人科	日本産科婦人科学会専門医制度専攻医指導施設 日本婦人科腫瘍学会専門医制度指定修練施設 母体保護法指定医師研修機関 日本周産期・新生児医学会母胎・胎児認定施設 日本女性医学学会専門医制度認定研修施設
眼科	日本眼科学会専門医制度研修施設
耳鼻いんこう科	日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会専門医研修施設 日本気管食道科学会認定気管食道科専門医研修施設（咽喉系）
歯科口腔外科	日本口腔外科学会認定準研修施設
放射線科	日本医学放射線学会放射線科専門医総合修練機関（診断、治療、核医学） 日本核医学会専門医教育病院 日本放射線腫瘍学会認定施設 日本IVR学会専門医修練施設 日本医学放射線学会画像診断管理認証施設
麻酔科	日本麻酔科学会麻酔科認定病院 日本集中治療医学会集中治療専門医研修施設
病理診断科	日本病理学会研修登録施設 日本臨床細胞学会施設
精神神経科	日本精神神経学会精神科専門医制度研修施設
乳腺外科	日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会インプラント実施施設 日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会エキスパンダー実施施設 日本乳癌学会認定施設、マンモグラフィ検診施設画像認定施設 遺伝性乳癌卵巣癌総合診療基幹施設
救急科	日本救急医学会救急科専門医指定施設
緩和ケア科	日本緩和医療学会研修認定施設 日本緩和医療学会緩和医療専門薬剤師研修施設

診療科定例カンファレンス一覧表 (令和5年4月現在)

月 曜 日	火 曜 日	水 曜 日
整形外科術後症例検討会 7:40am 循環器新患症例検討会 8:00am 泌尿器科入院・術前カンファレンス 8:00am 感染症科 microbiology round 8:20am 脳外科入院カンファレンス・抄読会 8:30am 脳神経内科カンファレンス 8:30am 麻酔科術前カンファレンス 8:30am *ICUモーニングラウンド 8:45am *ICU術前カンファレンス 11:00am	整形外科術前カンファレンス 7:40am *呼吸器画像カンファレンス (偶数週) 8:00am 外科抄読会 8:00am 泌尿器科病棟カンファレンス 8:00am 感染症科 microbiology round 8:20am 脳神経内科カンファレンス 8:30am 麻酔科術前カンファレンス 8:30am *ICUモーニングラウンド 8:45am *ICU術前カンファレンス 11:00am	*消化器CBM 8:00am (現在休止中) 消化器内科内視鏡治療術前カンファレンス 8:00am 泌尿器科抄読会 8:00am 感染症科 microbiology round 8:20am 麻酔科術前カンファレンス 8:30am *ICUモーニングラウンド 8:45am *ICU術前カンファレンス 11:00am
放射線診断カンファレンス 12:15pm 産婦人科症例カンファレンス 3:30pm 腎内病棟カンファレンス 3:30pm・4:00pm 内分泌内科症例検討会 3:30pm 呼吸器CBM 4:00pm 外科手術ビデオカンファレンス 4:30pm 皮膚科症例検討会 4:30pm 放射線科産婦人科画像カンファレンス (月1回第4月曜) 4:30pm 麻酔科症例カンファレンス 4:30pm 消化器内科症例検討会 4:30pm 産婦人科乳腺外科HBOCカンファレンス (第2月曜) 4:30pm 病理診断科放射線科カンファレンス (月1回) 4:45pm 小児科症例検討会・抄読会 4:45pm	放射線診断カンファレンス 12:15pm 血液内科5B病棟カンファレンス 1:30pm 脳卒中センター・3D病棟カンファレンス 2:00pm 腎臓カンファレンス 3:00pm 血液内科症例検討会・抄読会 3:00pm 外科術前術後カンファレンス 3:30pm 呼吸器内科症例検討会 4:00pm 脳神経内科抄読会 4:00pm	放射線診断カンファレンス 12:15pm 緩和ケアチームカンファレンス 1:00pm 歯科口腔外科カンファレンス 1:00pm 皮膚科カンファレンス 1:30pm
*ICUイブニングラウンド 5:00pm 呼吸器外科抄読会 5:30pm	*ICUイブニングラウンド 5:00pm *腎病理カンファレンス 5:00pm *造血幹細胞移植CBM (第2火曜日) 5:00pm 脳外科術前カンファレンス 5:00pm 整形外科術前症例検討会 5:00pm 泌尿器・放射線診断科カンファレンス 5:15pm 甲状腺穿刺細胞診レビュー 5:30pm がんゲノムエキスパートパネル 5:30pm 感染症研修会 5:30pm 眼科症例カンファレンス 6:00pm	*ICUイブニングラウンド 5:00pm 内分泌内科 Journal Club 5:00pm 循環器科シネ・RIカンファレンス 5:00pm

木 曜 日	金 曜 日
泌尿器科手術ビデオカンファレンス 7:30am *消化器CBM 8:00am 乳腺外科抄読会 8:00am 循環器内科症例検討会 8:00~9:00am 整形外科輪読会 8:15am 感染症科 microbiology round 8:20am *脳外科・脳神経内科合同カンファレンス 8:30am 麻酔科術前カンファレンス 8:30am *ICUモーニングラウンド 8:45am *脳外科入院・画像カンファレンス 8:50am 感染症科 meeting 9:30am *ICU術前カンファレンス 11:00am 呼吸器外科症例検討会 11:00am	泌尿器・病理カンファレンス (泌尿器科CBM) 8:00am 乳腺外科抄読会 8:00am Radiographicsテスト会 (隔週) 8:00am 感染症科 microbiology round 8:20am 脳神経内科カンファレンス 8:30am 麻酔科術前カンファレンス 8:30am 緩和ケア科カンファレンス 8:45am *ICUモーニングラウンド 8:45am *ICU術前カンファレンス 11:00am 放射線治療カンファレンス 11:00am
感染症科読書会 12:00pm 放射線診断カンファレンス 12:15pm 糖尿病・代謝内科症例検討会 1:30pm 小児がんカンファレンス 2:00pm 精神神経科コンサルテーション・ リエゾンカンファレンス 4:00pm *乳腺CBM 4:00pm 外科症例検討会 4:30pm 麻酔科勉強会 4:30pm 耳鼻いんこう科症例カンファレンス 4:30pm 小児科病棟カンファレンス 4:45pm	放射線診断カンファレンス 12:15pm 血液内科6D病棟カンファレンス 1:00pm 呼吸器外科他職種症例検討会 2:30pm 透析カンファレンス 3:00pm 精神科症例検討会 4:00pm 耳鼻いんこう科病棟カンファレンス 4:00pm *血液内科病理検討会 (CBM) (隔週) 4:30pm 消化器内科内視鏡フィルムカンファレンス 4:30pm頃 (検査終了後) 外科症例検討会 4:30pm 血液内科骨髓標本検討会 4:45pm
*ICUイブニングラウンド 5:00pm 内科系カンファレンス 5:00pm B脳外科術前カンファレンス 5:00pm *CPC (年5回) 5:00pm 泌尿器・放射線治療科カンファレンス (CBM) 5:00pm (隔週)	*ICUイブニングラウンド 5:00pm 放射線科アンギオカンファレンス 5:00pm 脳波所見検討会 5:00pm

* 複数診療・多職種
合同カンファレンス

周術期医療の質の向上

周術期（手術前・手術中・手術後）の医療の質の向上を図るため、2018年度より周術期統括部を新たに設置しました。周術期統括部は、手術を実施する手術センター、手術における麻酔管理を行う麻酔科、術後疼痛管理や様々な痛みをコントロールする疼痛管理科、集中治療室において重篤な患者さんの治療を行う集中治療科（ICU）の4部門から成ります。



I 手術センター

手術室10室、看護師39名、臨床工学技士2名、薬剤師2名から成る組織で、安全で効率の良い手術センター運営を目標として、日々の業務を行っています。2022年度の総手術件数は5,555件で、この中には手術支援ロボット（da Vinci）を用いた泌尿器科、外科、呼吸器外科の手術も含まれます。臨床工学技士は完全常駐体制で、手術室で用いられるすべての医療機器の動作保証、維持管理に勤めています。また薬剤師は、ほぼ完全常駐で、術中使用する薬剤の管理のみならず、術後疼痛管理に用いるPCAポンプ用の薬剤を手術センター内に設置したクリーンベンチで無菌調製しています。2023年3月には、病院情報システム（電子カルテ）の更新に合わせて手術部門システムを導入し、手術室スケジュール調整等の手術室管理機能を電子カルテシステムから手術部門システムに移行しました。



II 麻酔科

常勤医師は16名です。2022年度の麻酔科担当症例は3,133件でした。心臓血管外科以外の診療科の多彩な手術症例の麻酔を担当しています。術前外来におけるリスクの評価、心のケアからはじまり、症例に合わせて全身麻酔、硬膜外麻酔、脊髄くも膜下麻酔、IV-PCA鎮痛法、エコーガイド下神経ブロックを組み合わせ、患者さんに安心して手術に臨んでもらえる麻酔を行っています。安全面においては、麻酔科医控室3室全室に全手術症例のスレープモニターを設置して全症例のバイタルを監視できる体制にしています。また、北館4室

の室内監視カメラや術野モニター(顕微鏡手術や腹腔鏡・胸腔鏡手術を含む)の映像も麻酔科医の控え室で監視できます。2023年3月の手術部門システムの導入と同時に自動麻酔記録システムも更新しました。また日本麻酔科学会麻酔科認定病院、麻酔科専門医研修プログラム責任基幹施設として、専門医の取得を目標とした学会発表や論文作成の指導および必要症例研修の場の提供を行っています。



Ⅲ 疼痛管理科

疼痛管理とは、術後疼痛やがん性疼痛等あらゆる痛みをコントロールすることを言います。術後疼痛については、硬膜外麻酔や超音波ガイド下神経ブロックの併用に加えてIV-PCA鎮痛法を用い、手術翌日に専門の麻酔科医1名ならびに手術室看護師、病棟看護師、手術室担当薬剤師、病棟担当薬剤師、管理栄養士が術後患者を訪問して、必要な疼痛管理を行うAPS (acute pain service)を行っています。その他の疼痛管理に関しては、専門の麻酔科医が院内対診に応じています。



Ⅳ 集中治療科(ICU)

ICUは8床で、専任の医師2名が常時勤務しています。各科診療医、集中治療医とその他多数の医療職種で形成されたチーム医療を行なっています。2022年度ICU入室症例は1,082例で、概ね半数程度の術後、非術後比率です。当科では研修医ならびに専攻医の研修を積極的に受け入れており、研修医師はICUにおける手技、診断ならびに治療決定に中心的な役割を果たしています。なお、当院ICUは日本集中治療医学会の集中治療専門研修施設となっており、また特定集中治療室管理科Ⅰの施設基準も満たしています。



広い間口で患者さんを受け入れる



外来表

	月	火	水	木	金
内科総合診	○	○	○	○	○
膠原病内科	○		○	○	

内科総合診

診療スタッフ・規模

担当医師（主な担当医師）

総合内科・腎臓内科部長：家原 典之

（日本内科学会総合内科専門医・日本腎臓学会・日本透析医学会指導医）

総合内科担当部長：島 正巳

総合内科副部長：檜垣 聡

（日本救急医学会救急科指導医・日本プライマリ・ケア連合会指導医・日本集中医学会専門医・日本内科学会認定医・日本腹部救急医学会暫定教育医・ICLS・JMECCディレクター等）

腎臓内科医長：矢内 佑子

（日本内科学会総合内科専門医・日本腎臓学会腎臓専門医・日本透析医学会透析専門医）

腎臓内科医長：志水 愛衣

（日本内科学会総合内科専門医・日本腎臓学会腎臓専門医・日本透析医学会透析専門医）

感染症科医員：興語 葵

（日本内科学会認定内科医）

診療内容

内科総合診は原則上級医1名と内科専攻医1名（卒後3年）及び研修医で診療にあたっています。

症状が多彩である、または明確でないなど診療科を特定できない受診患者さんや、近隣医療施設からのご紹介に対応しています。総合診での詳細な問診、身体所見や各種検査の後に病態に応じて適切な診療科へのコンサルテーションを行い継続診療につなげています。内科専攻医や初期研修の先生方が初診外来診療を行いながら学べる場となります。



肺癌・間質性肺炎・ COPD・喘息など 幅広い診療

京都市内の呼吸器疾患診療の中心となる病院の一つとして、多彩な疾患を扱っています。社会の高齢化もあり、肺癌、肺炎、間質性肺炎による入院症例が増えています。新型コロナウイルス感染症のため停止していた結核症例を受け入れを再開したため、結核病床を持つ数少ない総合病院呼吸器科となっています。



診療スタッフ・規模

常勤職員8名、入院ベッド、一般病床34床、結核病床4床で年間入院症例約800例に対応しています。外来では1日50～60名の患者を2～3診で診療しています。

診療内容

年間約800例の入院があり、肺癌に対する抗癌剤・放射線治療をはじめ、間質性肺炎・肺炎・呼吸不全・COPD・喘息など多彩な疾患の診断・治療を行っています。2023年5月より結核病棟の稼働を再開し、活動性結核の治療を行えるようになりました。診断・治療として気管支鏡、CTガイド下生検の他、外科手術前のCTガイド下マーキングや膿胸に対するベッドサイド胸腔鏡も行っています。

地域連携、学会活動、その他

呼吸器学会、呼吸器内視鏡学会などに演題を発表しています。京都大学医学部呼吸器内科の関連団体であるNPO法人西日本呼吸器内科医療推進機構に所属しています。



消化器内科

Dept. of Gastroenterology

個々の専門性を 生かしながら消化器 疾患全般に精通した チーム医療を実践する

上・下部消化管、肝、胆膵等の幅広い疾患に、それぞれの医師が専門性を生かしつつ診療を行っています。各種カンファレンスも定期的に行い、外科、放射線科、病理診断科等と連携を取りながら集学的に治療方針を決定し、実践しています。



診療スタッフ・規模

常勤医師7名、専攻医2名、研修医1～2名で診療にあたっています。

指導体制としては日本消化器病学会認定指導医4名、日本消化器内視鏡学会認定指導医3名、日本肝臓学会認定指導医2名、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医2名が在籍しています。専攻医、研修医は日常診療だけでなく、内視鏡関連の検査、治療や超音波を使用した検査や局所治療、重症患者の全身管理なども積極的に行っています。

診療内容

2022年度年間入院患者数862人(病床数34床)、1日外来患者数70人前後です。

上部消化管内視鏡検査5,490例、下部消化管内視鏡検査1,384例、粘膜下層剥離術108例、粘膜切除術499例、胆膵内視鏡検査・治療183例、消化器がんに対する化学療法も積極的に行っています。

地域連携、学会活動、その他

病診連携の会を行い開業医の先生方との連携を密にし、多数の御紹介をいただいています。消化器病学会、消化器内視鏡学会、肝臓学会の指導施設であり、がん治療認定医機構教育施設、臨床腫瘍学会指導施設でもあります。一定期間の研修でそれぞれの認定専門医の取得が可能になります。

研修医、専攻医はもちろんスタッフ全員のやる気をのばす環境を大切にします。専攻医までは専門分野を絞り過ぎないで多くの症例を経験し知識や手技を習得することが重要です。「臨床は大変だけれどおもしろい」と思える研修を目指します。患者さんや他の医療スタッフから信頼される医師を目指して下さい。

科学的根拠に基づいた 最先端の薬物療法の実践 切れ目のないがん診療を 提供するコーディネーター としての役割

消化器がんの薬物療法以外に診療科の枠を越えた
集学的治療や原発不明がんなどの希少がんの薬物療法
も行っています。



診療スタッフ・規模

常勤医師2名 非常勤医師1名

日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医

日本がん治療認定機構がん治療認定医・指導医

診療内容

腫瘍内科はがん診療の4つの柱である手術、薬物療法、放射線療法、緩和療法のうち、主に薬物療法を扱います。さまざまな臓器のがん薬物療法の知識を有しているため、従来の臓器別の縦割りの診療ではなく、臓器横断的ながん薬物療法を行うことができます。

がん薬物療法に専門的な知識を持った医師が、抗がん剤治療に必要な固形がんの患者さんを中心に診療を行っています。診療科の枠を越えた集学的治療や原発不明がんや希少がんなどの困難症例の薬物療法も行っています。

がんの遺伝子異常に基づいて、より効果の高い薬剤を選択するがんゲノム医療にも力を入れており、適応のある患者さんに対しては、保険診療になったがんゲノム遺伝子パネル検査を積極的に行い、推奨薬が見つかった場合は医師主導治験や企業治験に繋がっています。治療の経過中にアドバンスド・ケア・プランニングも取り入れ、患者さんや家族の意向を尊重し、早期より院内他科、コメディカルや地域の医療・介護従事者とも連携して患者さんに最適な治療や望む生活が行えるようにコーディネートする役割も担っています。

地域連携、学会活動、その他

全国規模の質の高い臨床研究に参加して新規の治療開発に取り組んでいます。



循環器内科

Dept. of Cardiology

心臓・血管病の総合的治療を目指しています

患者への標準的治療が循環器内科のテーマです。心臓・腎動脈・下肢の動脈硬化性疾患に対して、超音波検査によるスクリーニング、高速CTとMRIによる診断を行っています。低侵襲のカテーテル診断とカテーテル治療を実施しています。

急性心筋梗塞、急性心不全等の救急疾患には24時間体制で対応しています、この地域の循環器診療の拠点病院です。



診療スタッフ・規模

常勤職員5名、専攻医3名で、入院ベッド31床の入院診療を担当。1日60人の外来患者を新患1診、予約再来1診で診療しています。

診療内容

ICUと密接な関係を保ち、循環動態悪化症例に対しては、IABP、PCPSで対応しています。心肺停止後の症例では低体温療法も行っています。年間720件の冠動脈造影検査、350件の冠動脈カテーテル治療、115件の腎動脈・下肢動脈ステント、48件のペースメーカー植え込み術を行っています。

地域連携、学会活動、その他

地域連携は重要です。地域医師会の先生を対象に「西高瀬川病診連携カンファレンス」を開催しています。当施設は循環器学会研修指定病院、日本心血管インターベンション治療学会研修関連施設となっています。内科学会、循環器学会、心血管カテーテル治療学会、循環器研究会には年間6演題を発表しています。研修医・専攻医の発表もサポートしています。



検尿異常から末期腎不全、透析合併症、腎移植患者の管理まで腎疾患の始まりから最後までを診療する

無症候性血尿、蛋白尿から慢性腎炎、ネフローゼ症候群、急性・慢性腎不全、維持透析、透析中の合併症、腎移植患者の管理まで全ての腎疾患を対象として診療しています。ガイドラインに即した、エビデンスに基づいた標準的な治療を行うことをモットーとしています。当院では、あらゆる腎疾患の治療を研修することができます。また全ての体外循環を用いた治療が可能です。



腎生検

緊張する手技のひとつですが、確定診断をつけ、治療方針の決定には必須です。慎重に、確実に。

腹膜透析のチューブ交換

感染を起こさないためにも清潔に。腹膜透析は色々と手のかかる事も多いのですが、患者さんのQOLも高く、また手作り感のある、やりがいのある治療法です。



週間予定

	月	火	水	木	金
午 前	透析・病棟診療				
午 後	病棟診療	腎生検	病棟診療	シャント手術 病棟診療	病棟診療
カンファレンス 抄読会	病棟 カンファ 15:30	入院患者 15:00 腎病理 17:00		内科 17:00	透析 カンファ 15:00

土曜日の透析は当番医

診療スタッフ・規模（2023年4月現在）

部 長 家原典之 内科専門医・指導医、腎臓学会専門医・指導医、透析医学会専門医・指導医

副部長 富田真弓 内科学会（専）、腎臓学会（専・指）、透析医学会（専・指）

医 長 矢内佑子 内科学会（専）、腎臓学会（専）、透析医学会（専）
志水愛衣 内科学会（専）、腎臓学会（専）、透析医学会（専）
山本耕治郎 内科学会（専）、腎臓学会（専・指）、透析医学会（専・指）、栄養代謝学会（認）

医 員 池田紘幸 内科学会（専）、腎臓学会（専）、透析医学会（専）
専攻医 松田 稜

屋根がわら方式での指導で若い先輩医師が直接指導にあたり、何事も聞きやすく、学びやすい環境です。日本腎臓学会認定研修施設、日本透析医学会認定施設であり、腎臓専門医、透析専門医の資格取得が可能です。入院病床は14床、透析ベッドは19床です。

2022年度診療実績

のべ入院患者数	347
透析導入数	63
腎生検数	22
主要疾患の入院患者数	
慢性腎炎	25
ネフローゼ	17
RPGN	1
急性腎炎	0
慢性腎不全	134
急性腎不全	8
膠原病腎症	3
多発性嚢胞腎	4



エコーガイド下穿刺法

当科では安全なエコーガイド下血管穿刺をしています。これは内頸静脈より、透析用カテーテルを挿入している所です。内頸静脈内に穿刺針が白く光っているのが、はっきり見えます。慣れると針をエコーガイド下に自由に誘導できるようになり、安全な穿刺が可能になります。

最近では、当初の中心静脈から、内シャント穿刺、また体表からは触知困難な末梢静脈までその範囲を広げ、さらに内シャントの状態評価についても応用しています。

地域連携、学会活動、その他

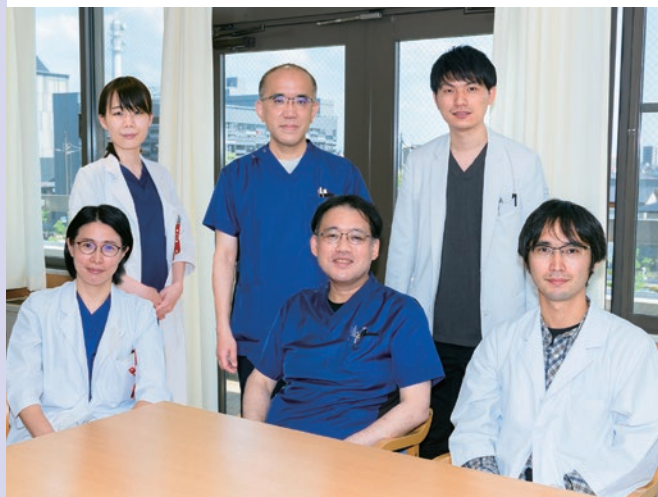
日本腎臓学会・総会・西部学術大会、日本透析医学会などには毎年演題を発表しています。発表した内容はなるべく論文にまとめ、業績となるように心がけています。

- 1) The Case | Hyperammonemia in a non-cirrhotic hemodialysis patient.
Taniguchi T, Tomita M, Iehara N.
Kidney Int. 2023 Jan;103(1):233-234
- 2) 栄養療法の併用で軽快した侵襲的治療抵抗性上腕動脈表在化後リンパ瘻の1例。 山本耕治郎、富田真弓、池田紘幸、松田稜、谷口智基、矢内佑子、家原典之 日本透析医学会雑誌 2022 ;55巻8号:p493-497
- 3) Seroma as a Rare Complication of Autologous Arteriovenous Fistula Creation in the Forearm of a Hemodialysis patient: A Case Report.
Taniguchi T, Yamamoto K, Tomita M, Iehara N.
J Ultrason. 2022 Oct 1;22(91):e240-e244.

頭痛、めまい、しびれから 脳卒中、神経難病まで

脳神経内科は、脳卒中、けいれん、髄膜炎・脳炎などの救急疾患から、頭痛、めまい、しびれや多発性筋炎、パーキンソン病、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症などの神経難病を含む神経疾患を内科的に治療をする分野です。

なお、うつ病、統合失調症などは精神科で扱う疾患です。病歴、神経学所見から診断をつけて、脳CT、脳波、脳MRI等の機器で病変を確かめて、治療をしています。



診療スタッフ・規模

常勤職員6名、専攻医(シニアレジデント)1名。入院患者さんは、1日当たり25名前後で、外来患者さんは1日当たり約35名です。神経学会専門医は4名で、指導医4名です。

診療内容

1年間の入院患者さんは、450名で、脳卒中の患者さんは251名、神経難病の患者さんは41名です(2022年度)。超急性期のrt-PA対象患者さんを受け入れて(2022年度は10名)、重症脳炎、けいれん重積の患者さんはICUで治療をします。

脳波検査、神経伝導検査、筋電図検査、脳血流検査、頸部血管エコーなどの検査についてカンファレンスを行い、診療に役立てています。

地域連携、学会活動、その他

地域のかかりつけ医からの紹介患者さんを積極的に受け入れています。また、神経難病の患者さんのレスパイト入院も行っています(2022年4月から2023年3月で9名)。



憎き悪性細胞と熱く 戦おう、寛解から 社会復帰を目指して

血液腫瘍と聞けば、厳しい、辛い、予後不良の経過、を想像するに容易なイメージがありますが、近年造血幹細胞移植の進歩だけでなく、分子標的治療の出現により予想以上に予後が改善されてきています。我々は、プロとしてEBMに基づいた最新の専門的治療を提供し積極的に戦う反面、患者さんのニーズに即した心通う診療を目指して日々邁進しています。



診療スタッフ・規模

常勤職員6名（日本血液学会専門医4名）、専攻医2名、研修医（1～2年目ローテーター）1～2名、入院ベッド35床（無菌室11床）で常時入院30～45名、外来は平日毎日、1日約40名を、新患は毎日受け付けています。

診療内容

年間入院患者総数は約500名、その80%以上を造血器腫瘍が占め、化学療法及び造血幹細胞移植（自家、同種）目的の入院となっています。主な疾患は急性・慢性白血病、骨髄異形成症候群、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫であり、その他再生不良性貧血、特発性血小板減少性紫斑病、血球貧食症候群などが占めます。また、初回治療の終了したADLのよい患者については外来化学療法センターでの治療も積極的に導入しています。同種造血幹細胞移植は、血縁・非血縁、骨髄・末梢血・臍帯血、HLA半一致を含む全ての移植に対応しています。

地域連携、学会活動、その他

日本血液学会、日本造血・免疫細胞療法学会、日本臨床腫瘍学会には積極的に参加し、がん治療全般について広い視野で研鑽を積んでいます。

内分泌疾患診療の ハブとして 最高水準の医療を提供

国内の内分泌臨床を牽引する指導的立場にあり、最高水準の内分泌診療を提供しています。各種ホルモン負荷検査、他科と共同での画像診断法を駆使し、病態の確実な診断と治療を実施しています。難病、遺伝子診断にも取り組んでいます。



診療スタッフ・規模

常勤医師3名（内分泌代謝科専門医1名、高血圧専門医1名、骨粗鬆症認定医1名）、入院ベッド6床。1日平均40名の専門外来、甲状腺エコー、針細胞診、シンチグラフィ、骨塩定量による診療を行っています。

診療内容

甲状腺疾患； ^{99m}Tc 等、年間約50例の甲状腺シンチグラフィを実施し診断に役立てています。バセドウ病に対する ^{131}I 内用療法のできる施設を有しています。甲状腺癌についてはFNAによる診断から術後のアブレーション目的のアイソトープ治療まで統合的な診療を行っています。

副腎疾患；二次性高血圧症の重要な原因である原発性アルドステロン症（PA）、クッシング症候群や褐色細胞腫を扱い、特にPAの病型診断に不可欠な検査である副腎静脈サンプリング（AVS）には実績があります。

内分泌疾患；下垂体、副甲状腺、性腺、骨代謝など内分泌疾患全般について幅広く取り扱っています。

地域連携、学会活動、その他

内分泌領域の医師養成のため、2007年度より「京都地区病院研修医・若手医師のための代謝・内分泌セミナー」を糖尿病内科、京都医療センター内分泌代謝センターなどと年2回行っています。内分泌代謝内科専門医認定教育施設として日本内科学会、内分泌学会、その他研究会に年間約10題を発表しています。

参考文献

- 1) 小松弥郷；脂質異常症治療薬スタチンを中心に 糖尿病と骨粗鬆症治療薬を考える、井上大輔／編、日本医事新報社、111-116、2018。
- 2) 小松弥郷；甲状腺ホルモンと骨代謝 甲状腺疾患診療マニュアル（改訂3版）、田上哲也他／編、診断と治療社、2020。

糖尿病代謝内科

Dept. of Diabetes and Metabolism

健康な人と変わらない 日常生活の 質の維持のために

糖尿病の治療の目標は、適切な血糖コントロールにより合併症の発症、進展を阻止して健康な人と変わらない生活をおくることができるようにすることです。

当科では、他科と連携をとりながら、看護師、薬剤師、栄養士と力をあわせたチーム医療にて患者さんの健康のために取り組んでいます。



診療スタッフ・規模

常勤医師3名(日本糖尿病学会専門医3名、日本内科学会総合内科専門医2名、日本病態栄養学会専門医2名、日本肥満学会肥満症専門医2名)、専攻医1名、糖尿病看護認定看護師1名、日本糖尿病療養指導士15名、京都府糖尿病療養指導士4名。入院ベッドが12床で、1日平均47名の糖尿病・肥満症専門外来があり、専門看護師によるフットケアと療養指導もあります。入院・外来では管理栄養士10名による栄養指導が行われています。

診療内容

糖尿病患者に対しては、厳密な食事・運動指導と薬物療法の併用により、生涯にわたりQOLを低下させないための専門医と療養指導士によるチーム医療が行われています。市内の糖尿病治療の中核病院として、ケトアシドーシスや低血糖といった、糖尿病急性合併症も多数受け入れています。年間およそ250名の入院患者があり、当科通院中の糖尿病患者は約2,000名です。

糖尿病の教育入院は、主に3泊4日・7泊8日・11泊12日の3つのコースでおこなっていますが、個々のケースに応じて適宜変更し、患者中心の治療を実践しています。

もう1つの当科の特色である肥満症治療に関しては、肥満症外来を開設し、減量困難例に対しては入院治療も行っています。

地域連携、学会活動、その他

日本糖尿病学会認定教育施設、日本肥満学会認定教育施設となっておりそれぞれの専門医資格の取得が可能です。

学会活動では、日本糖尿病学会の総会や近畿地方会、日本肥満学会、日本病態栄養学会などに年間約3演題を発表しています。

地域連携については、糖尿病に特化した地域連携の会を開催し近隣開業医との連携を深めています。また、糖尿病に関する病病連携の会や研究会にも積極的に参加し、他院との連携・情報交換を通じて診療レベルの向上に努めています。

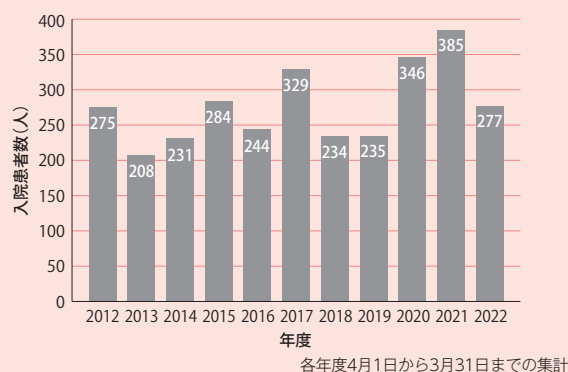


適正な感染症診療と 医療関連感染対策の 徹底をめざして

微生物検査、特にグラム染色や培養検査を始めとする細菌学的検査を駆使し、細菌感染症を的確に診断し、耐性菌を選択しないよう適切な抗菌薬を適正な期間だけ使用する治療を心がけています。当院の伝統である輸入感染症診療や拠点病院としてのHIV診療だけでなく、ICTを主導して院内感染対策にも力を入れています。



入院患者数の推移



2019年に診療した主な感染症など

- ・ 尿路感染症・菌血症
- ・ 肺炎
- ・ 感染性腸炎
- ・ インフルエンザ
- ・ HIV/AIDS
- ・ 感染性心内膜炎
- ・ Septic shock
- ・ 輸入感染症
— 渡航者下痢症、デング熱、
など
- ・ 伝染性単核球症
- ・ 髄膜炎
- ・ 皮膚軟部組織感染症
- ・ 骨髄炎
- ・ 病巣不明の菌血症
- ・ 日本海裂頭条虫症
- ・ 不明熱



診療スタッフ・規模

- 副院長 清水恒広(しみず つねひろ)
資格 日本小児科学会専門医・指導医
日本感染症学会専門医・指導医
Infection Control Doctor (ICD)
- 部長 栃谷健太郎(とちたに けんたろう)
資格 日本内科学会総合内科専門医
日本感染症学会専門医・指導医
Infection Control Doctor (ICD)
- 医 長 與語葵(よご あおい)
資格 日本内科学会認定内科医
元林寛文(もとばやし ひろふみ)
資格 日本内科学会認定内科医
日本救急医学会救急専門医
- 医 員 岩本伸紀(いわもと のぶき)
資格 日本専門医機構認定内科専門医
- 谷口昌史(たにぐち まさし)

規模：第2種感染症病床(すべて陰圧室)を8床保有し入院病床として使用しています。

診療内容

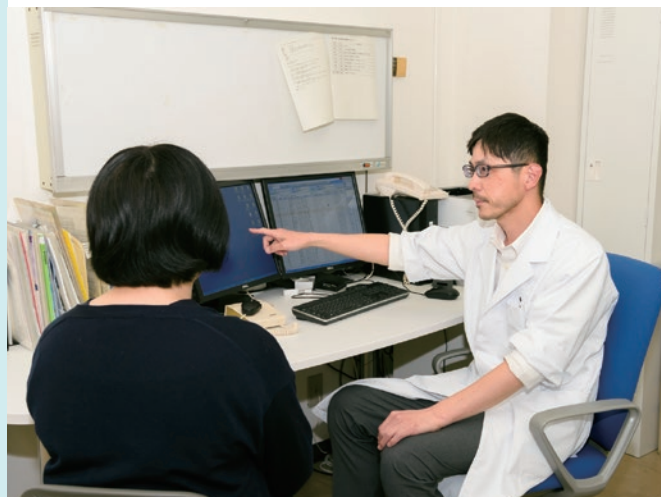
主として、尿路感染症、肺炎、感染性腸炎、インフルエンザ、感染性心内膜炎、Septic shock、皮膚軟部組織感染症、筋骨関節感染症、リケッチア症、病巣不明の発熱などの入院診療を行い、HIV/AIDS(年間新規患者約10名)及び、渡航者下痢症、デング熱、マラリアなどの輸入感染症も伝統的に数多く診療します。2020年初頭から新型コロナウイルス感染症の入院患者も京都府内で中心的に受け入れています。入院中の血液培養陽性症例、コンサルト症例、広域抗菌薬使用症例、多剤耐性菌保有症例など平均約30~40名をフォローし、各診療科への診療支援を行っています。

地域連携、学会活動、その他

日本感染症学会、日本小児感染症学会、日本環境感染学会、日本臨床微生物学会、京滋で開催の感染症関連研究会に年間8~10演題発表しています。初期研修医など若手医師対象に、感染症診療の基本がインタラクティブに学べる研修会を定期的に開催しています。

自分らしさや 生きがいを保ちながら 生活をするために

外来診療を通じて、うつ病や統合失調症等の精神疾患を持つ患者様がいきいきと日常生活を送られる事を支援しています。また、内科や外科など他科に入院中の患者様で精神医学的診断や治療が必要な方には対診を通して積極的に関わり、緩和ケアをはじめ体の病気で入院した患者様の精神的問題をサポートする事を目標としています。



診療スタッフ・規模

常勤医師 1 名と応援医師 2 名、精神保健福祉士、臨床心理士が各々の専門性を生かしてチームとして関わっています。1 日約 50 名の通院患者の診療に加え、コンサルテーション・リエゾン活動や緩和ケアチームへの参加を通して入院患者への対応も行っています。

診療内容

医師による診察の他、必要に応じて頭部 CT、MRI、脳波、SPECT や心理検査等を行い、うつ病や神経症性障害、統合失調症、認知症等幅広い疾患に対して治療を行っています。また、他科入院中で精神的問題を抱えている患者様にも主治医と連携を取りながら問題解決に向け活動しています。

地域連携、学会活動、その他

日本精神神経学会指定の研修施設になっています。また、精神保健福祉相談員を中心として保健、福祉の情報提供に努めると共に関係機関と連携をとり患者支援に努めています。

子どもにやさしい 小児科診療

将来を担う子どもたちのための医療を守り発展させていくことを使命と考えています。日本小児科学会専門医研修支援施設以外に、日本小児神経学会、日本小児血液・がん学会、日本血液学会の各専門医研修施設として、小児科学会専門医12名、小児神経専門医2名、小児血液・がん専門医3名、血液専門医5名、救急科専門医1名をはじめ、スタッフ全員で研修医の指導に熱意を持って取り組んでいます。



診療スタッフ・規模

院長・副院長以外に常勤医は12名の常勤医（小児科専攻医を含む）、外来4診（午前は主に一般急病診、午後は各専門外来）、一般入院病床26床、NICU/GCU 10床で診療しています。

診療内容

血液・腫瘍、神経、代謝内分泌、腎臓、アレルギー、未熟児、新生児の他、予防接種、乳幼児健診、感染制御など幅広い専門領域をカバーしています。2次救急にも力を入れており、周辺医療機関のみならず急病診療所からの後送も積極的に受け入れています。

地域連携、学会活動、その他

京都西南部小児科地域連携の会の主要メンバーとして、年2回の勉強会に参加しています。2022年度は小児血液がん学会、小児救急医学会、小児科学会京都地方会など学会演題として11演題、論文として3編を発表しました。



総合外科(消化器外科+小児外科)

Dept. of Surgery(Gastroenterological and Pediatric Surgery)

最新の技術と 幅広い視野を持った 外科医の育成

消化器がんに対して、手術療法を適切な時期に、できる限り低侵襲な標準術式で行うことを基本に、他職種の多角的な検討を経て、根治を追求する拡大手術や、症状コントロールのための縮小手術にも対応できる、幅広い視野を持った外科医を育てます。一方で急性腹症に対する緊急手術症例も豊富で、迅速に判断して適切に対応する修練を積むことができます。当院には心臓血管外科がありませんが、新しい専門医制度にも対応し他施設と連携して外科専門医資格の取得が可能なようにカリキュラムを組んでいます。



診療スタッフ・規模

部長4名、副部長3名、医長5名、医員2名の合計14名のスタッフで診療にあたっています。乳腺外科と合わせての割り当て入院病床数は34床で、年間入院患者数は延べ1,146人、年間手術件数は913件で、そのうちの約6分の1が緊急手術です。

診療内容

消化管および肝胆膵のがんを中心に、胆石、ヘルニアなどに対する予定手術と、虫垂炎・消化管穿孔・腸閉塞・急性胆嚢炎などに対する緊急手術を数多く担当し、臨床経験を積み手術手技を学ぶことができます。胃癌・大腸癌における内視鏡手術の割合はそれぞれ94.6%・96.8%で、その他の疾患についても予定／緊急、昼夜を問わず可能な限り腹腔鏡下手術で行っています。全体としての内視鏡手術率は昨年度84.8%でした。

地域連携、学会活動、その他

地域医療機関との絆を大切に考え、顔の見える関係づくりに努めています。紹介や相談に即応するとともに、手術を経て安定した患者さんは元のかかりつけ医に逆紹介します。がんで一定期間のフォローが必要な場合でも、かかりつけ医との二人主治医体制で診ていきます。

スタッフの学会・研究会・セミナーへの参加を奨励・援助し、示唆に富む症例があれば担当した研修医に学会発表・論文作成の機会を与えます。当直明けは原則的にオフとして帰宅、週末も交代で休暇を取れるようにシフトを組んでいます。

産休、育休、時短勤務などにも柔軟に対応し、その中でもキャリアパス形成への配慮を心がけています。

あなたの大切な女性を 守りましょう

画像検査をはじめ病理診断、手術、薬物療法、放射線治療、緩和医療、患者会、臨床試験など乳腺の診療は多岐にわたります。大切な女性を守るため、乳腺のオールマイティを目指して一緒にトレーニングしませんか。



診療スタッフ・規模

部長 森口喜生 日本乳癌学会評議委員、
京都大学医学部臨床教授
専門資格 日本乳癌学会乳腺専門医(指導医)
日本外科学会専門医(指導医)
副部長 末次弘実 専門資格 日本外科学会専門医
日本乳癌学会乳腺専門医(指導医)
医長 吉岡祥子 専門資格 日本乳癌学会乳腺専門医
日本外科学会専門医
専攻医 服部響子

診療内容

乳癌の診断・治療が中心で、その他葉状腫瘍や、線維腺腫、乳腺炎、乳腺症などの診療を行っています。乳癌の診療では『エビデンスに基づいた医療』と『個別化治療』を基本方針としています。集学的な乳癌の治療の中で最適な組み合わせを検討し、患者様のご意見や価値観を考慮した上で治療方針を決定しています。乳癌の術前治療による乳房温存率の向上や、低侵襲な手術・治療を行っています。また、種々の臨床試験に参加し新しい治療も積極的に行っています。検査では超音波検査、マンモグラフィ、乳房MRI、CT、マンモトーム生検(エコーガイド、ステレオガイド)、穿刺吸引細胞診、針生検を行い、手術では乳房温存手術、乳房切除術、センチネルリンパ節生検(蛍光色素法)はもちろんのこと、乳房再建手術も、積極的に行っています。薬物治療ではガイドラインに基づいて化学療法、ホルモン療法、分子標的治療等を行っています。また、2019年から、がんゲノム医療も開始しました。

診療実績、治療成績、疾患別症例数：

2022年度 乳癌手術82例、乳房再建術6例、その他良性腫瘍、線維腺腫など約10例。化学療案件数 月間約40例、マンモトーム生検 年間約100例。

進行度	10年累積生存率	サブタイプ	10年累積生存率
I	92.00%	Luminal type	90.90%
II	86.10%	Luminal-HER2	92.30%
III	87.00%	HER2 type	82.80%
IV	47.00%	TNBC type	82.70%

地域連携、学会活動、その他

日本乳癌学会総会などの全国学会や京滋乳癌研究会、京都乳癌コンセンサス会議などでの発表、さらに各種臨床試験への参加も行っています。また、ピスケットの会(当院乳癌患者会)で定例会、会報発行などを行っています。運営を通じ乳がん情報の発信、啓蒙活動を行っています。また、地域連携バスによる地域の医療機関の先生と連携した早期乳癌の診療も行っています。

患者さんに優しい ～胸腔鏡手術～の技術 向上に努めています

低侵襲で「患者さんにやさしい」とされる胸腔鏡手術を30年近く行って来ました。スタッフは呼吸器外科専門医で3名、専攻医2名です。手術だけでなく呼吸器疾患全般・全身管理を身につけることが可能です。2014年からロボット支援胸腔鏡手術(da Vinci手術)を導入しました。当科の特徴として、診断から治療、さらに終末期までトータルに診療する方針です。



診療スタッフ・規模

常勤4名[うち日本外科学会専門医/日本胸部外科学会認定医/日本呼吸器外科学会専門医・評議員、日本呼吸器学会呼吸器専門医、日本臨床腫瘍学会暫定指導医・肺癌学会評議員；1名、日本外科学会専門医・指導医/日本呼吸器外科学会専門医・評議員/がん治療認定医；1名、日本外科学会専門医、日本呼吸器外科学会専門医、日本呼吸器学会呼吸器専門医、がん治療認定医；1名、専攻医；1名]で、外来は月・木・金曜の午前午後。手術は月・火・水曜の午前午後です。ここ数年手術症例は増加傾向にあり、200例前後の全麻手術を行っています。90%程度を完全胸視下に行っています。

診療内容

胸部外科一般：肺癌、転移性肺腫瘍、気胸、感染性肺疾患(結核・膿胸など)、縦隔腫瘍、胸壁腫瘍、重症筋無力症に対するロボット支援胸視下拡大胸腺摘出術、手掌多汗症(胸腔鏡下交感神経切除術)、漏斗胸(NUSS法)などを手術対象疾患として診療しています。がん拠点病院として呼吸器内科・放射線科とともに集学的治療(手術・化学療法・放射線治療)を行っています。

地域連携、学会活動、その他

京都市立病院みぶ病診連携カンファレンスの開催や、京都医学会・京都病院学会の他、日本呼吸器外科・日本胸部外科・日本外科・日本肺癌・日本呼吸器内視鏡学会などで演題発表を行っており、各学会の認定修練施設でもありますので専門医取得も可能です。内視鏡手術の技術向上のためドライラボコーナーを設けています。その他、京都大学呼吸器外科と連携をとっています。



脳神経疾患の迅速で的確な治療の実践

最新の知見と技術を積極的に取り入れ、科学的根拠に基づいた治療を目指します。



診療スタッフ・規模

常勤3名[日本脳神経外科学会専門医・指導医2名／日本脳卒中学会専門医・指導医2名、日本脳神経血管内治療学会専門医・指導医1名、日本神経内視鏡学会技術認定医2名]。

診療内容

脳神経外科領域全般を対象としています。

当院は日本脳卒中学会一次脳卒中センターに認定されており、脳卒中の診療に力を入れております。神経内科と連携し、超急性期の脳梗塞治療（rt-PA投与や血栓回収療法）や他の脳卒中疾患に対して、保存的、外科的治療、血管内治療を選択し総合的な治療を行っています。頭部外傷についても、軽症から手術加療を要す重症例まで、迅速に対応出来る体制を整えています。また、脳腫瘍も最新のナビケーションや神経モニタリングを利用し、安全に手術を行い、放射線治療および化学療法についても他科と連携し集学的に行うことが可能です。

地域連携、学会活動、その他

脳卒中地域連携パスに参加し、急性期から慢性期を地域完結型で行うことを目指しています。日本脳神経外科学会、日本脳神経血管内治療学会、日本脳卒中学会など主要学会に所属し、日本脳神経外科学会専門医訓練施設、日本脳卒中学会専門医訓練施設に認定されています。所属学会での多数の学会発表に加え、地域フォーラムや市民公開講座など積極的に参加しています。

関節と脊椎の エキスパートになろう！

整形外科の対象となる分野は大変広く、頭と内臓を除くすべての領域です。救急外傷から変性疾患やスポーツ障害も含め、乳幼児から高齢者までが含まれます。とりわけ急速に進む日本の高齢化社会では関節疾患や脊椎疾患が激増しています。腰痛と関節痛は病院に来院する全患者の受診動機の上位3位以内に入っていることをご存知ですか。



診療スタッフ・規模

スタッフは部長3名、医長3名、医員2名です。関節・脊椎・リウマチ・スポーツ障害の専門外来と救急外傷を行っています。整形外科病床は50床。

診療内容

2021年の年間手術件数は996例（うち人工股関節173例、人工膝関節106例、脊椎手術330例）。人工関節外科センターでは実績のあるセメント人工関節で、困難な脱臼症例や再置換術を手がけ、脊椎外科センターでは広範囲固定術から最少侵襲手術前各種の手術を施行しています。

地域連携、学会活動、その他

地域連携の4つの会を主催し、2019年では国内外で29回の発表と12編の論文総説を発表しました。整形外科専門医5名・リウマチ専門医1名・日本整形外科学会スポーツ医1名。



アレルギー・皮膚感染症 を中心に皮膚疾患の 専門医をめざして

当科では、病診連携・院内連携を大切にして、地域の基幹病院として皮膚疾患全般に対する診療を行っています。皮膚疾患は、アレルギー性疾患・アトピー性皮膚炎・乾癬などの角化症・水疱症・感染症・皮膚腫瘍など多岐にわたります。これらの疾患に対し標準治療が提供できるよう精進しています。



診療スタッフ・規模

常勤医師4名(皮膚科専門医3名)・非常勤医師4名で、入院では病床8床での診療および外来では1日に約65名の患者を3～4診で診療をしています。手術件数は、年間で約400件です。

診療内容

外来では、皮膚疾患全般の診療を隈無く行っています。また、午後診では各種の皮膚アレルギーテストや光線療法などを行い、アトピー性皮膚炎に対しては専門外来を設けています。

重症の疾患や手術例では積極的に入院加療を行っています。特に、蜂巣織炎などの細菌感染症や带状疱疹などのウイルス性皮膚疾患では早期の対応に心がけています。

手術では、腫瘍切除や皮膚潰瘍に対する植皮術まで幅広く手がけています。また、高齢化社会を背景に皮膚がんの手術が増加しています。

地域連携、学会活動、その他

地域の医療機関との連携を密にして、多くの患者さんの紹介を受けており、病状が落ち着けば逆紹介を進めています。

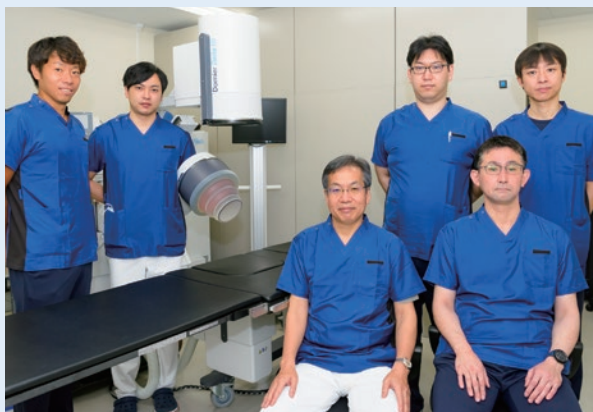
学会活動では、皮膚科学会の総会・京滋地方会などの学会やいろいろな研究会に参加して、情報収集・意見交換に当たるとともに、積極的な演題発表を行っています。

当科は、日本皮膚科学会認定皮膚科専門医研修施設および京都府立医科大学皮膚科の研修基幹施設として、皮膚科専門医の育成に尽力しています。研修医の方々には、外来・入院での診療や手術への参加を通して、皮膚疾患の勉強のお手伝いをさせて頂いております。



最先端医療機器を 駆使し、高度なチーム 医療を提供します

従来、泌尿器科は非常に柔軟に医療機器の進歩を受け入れ、それらの応用を重ね発展してきました。より低侵襲に、より確実に、という流れは、泌尿器科学においては必然です。当院でもその流れを汲み、ロボット支援手術・泌尿器内視鏡手術を柱とした低侵襲治療を中心に高度なチーム医療を提供しています。最先端医療機器（ハード）とチーム医療（ソフト）の融合にあなたも参加しませんか？



診療スタッフ・規模

清川岳彦（部長：日本泌尿器科学会専門医・指導医、日本泌尿器内視鏡学会・日本内視鏡外科学会腹腔鏡技術認定医、泌尿器ロボット支援手術プロクター認定制度認定医、京都大学医学部泌尿器科臨床教授）、堤尚史（副部長：日本泌尿科学化専門医・指導医、日本泌尿器科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医）、上山裕樹（医長：日本泌尿器科学会専門医・指導医、日本泌尿器内視鏡学会腹腔鏡技術認定医、泌尿器ロボット支援手術プロクター認定制度認定医）、松岡崇志（医長：日本泌尿器科学会専門医・指導医、日本泌尿器内視鏡学会腹腔鏡技術認定医）、平松和磨（専攻医）、阿部真也（専攻医）の6名で入院病床16床、1日約47名の外来患者の診療にあたっています。病床は手術患者中心に据えた急性期病床の形態で運用され、週6列の手術枠で、年間589例の手術を施行、その合間に年間149例の前立腺生検、116例の体外衝撃波結石治療、584例の膀胱鏡検査、167例の尿管ステント操作、803例の尿流量動態検査などを行っています。

診療内容

前立腺癌、腎癌、尿路上皮癌に代表される尿路生殖器悪性疾患に加え、前立腺肥大症や尿路結石症などの良性疾患を含めた泌尿器科疾患を幅広く取り扱っています。泌尿器科は、医療機器の進歩を受け入れ、それらの応用を重ね発展してきた歴史があり、当院でも、最先端医療機器を駆使した高度なチーム医療体制を整え、日々診療にあたっています。3次元内視鏡を用いた3D腹腔鏡下手術、ダヴィンチ手術支援ロボットを用いた前立腺癌手術、腎癌手術や膀胱癌手術、前立腺肥大症に対するホルミウムレーザーを用いた経尿道的前立腺核出術（HOLEP）、尿路結石に対する細径軟性尿管鏡を用いた経尿道的レーザー碎石術（f-TUL）などがその一例です。特にダヴィンチロボット支援手術は年間139件にのぼり、日常診療としての先端医療に触れていただけたと思います。手術以外の分野においても、精巣癌や尿路上皮癌に対する抗腫瘍化学療法、腎癌に対する分子標的療法、前立腺癌に対する内分泌療法などを担当しており、幅広い薬物療法に関する研修が可能です。

地域連携、学会活動、その他

地域の医療機関との間では、積極的に手術対象患者、救急患者を受け入れ、治療が落ち着いた後には逆紹介の形で戻っていただく良好な関係を築いています。また、京都市前立腺がん検診の二次精密検診施設としての機能も果たしています。日本泌尿器科学会や日本泌尿器内視鏡学会などの国内学会はもちろんのこと、アメリカ泌尿器科学会やヨーロッパ泌尿器科学会などの国際学会にも積極的に参加し、発信しています。京都大学医学部泌尿器科臨床教授としてポリクリ学生を受け入れるとともに、他施設との研修医間の交流の場を設定し、症例発表、論文作成などをサポートしています。

女性の、妊娠も含めた 幼児期から老年期までの 全期間における ケアをめざす

ガイドラインに基づき、かつQOLの向上をめざす診療をモットーにしています。女性の全般的な健康の手助けから、すべての婦人科疾患に対する治療、診療に取り組んでいます。より安全で快適な正常分娩をめざす手助けと、かつ婦人科疾患も含めた、産科合併症、産科救急には24時間受け入れ体制で臨み、地域における産婦人科診療の拠点病院としての役割を担っています。



診療スタッフ・規模

常勤職員6名、非常勤職員2名で、入院ベッド23床（産科17床、婦人科6床）、1日40～50名の外来患者を、新患、予約再診、妊婦健診の3つの診察室で診療しています。日本産科婦人科学会専門医が5名（うち4名が指導医）、日本婦人科学会婦人科腫瘍（専門医）が1名、日本周産期・新生児医学会周産期専門医が2名（うち指導医が2名）、日本女性医学学会女性ヘルスケア指導医が1名、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医が1名、日本がん治療認定医機構がん治療認定医が1名です。

診療内容

婦人科疾患では、子宮筋腫などの良性疾患に加えて、年間約100例の婦人科悪性疾患に対して、手術療法、他、術前・術後化学療法、放射線療法、ホルモン療法を駆使して集学的治療を行い、年間約280例（悪性疾患手術約100例、鏡視下手術約100例、帝王切開術約50例）の手術を行っています。ハイリスク症例を中心に年間約170例の分娩を管理、この内、54例が帝王切開術です。小児科、他科との連携により、合併症妊娠やハイリスク分娩を管理、総合周産期システムにより年間約40例の母体・産褥搬送を受け入れています。加えて外来診療では産婦人科領域の内分泌疾患、STI（性感染症）を含めた感染症の診断の治療や婦人科・周産期領域における遺伝学的疾患に対する診療を行い、女性のヘルスケアを包括的に診療しています。

地域連携、学会活動、その他

地区医師会の開業医の先生を対象に年1回「京都市立病院みぶ病診連携カンファレンス」を開催しています。地域医師会の講演や医療相談にも積極的に参加し、日本産科婦人科学会や各種研究会での発表や論文の作成を推奨しています。



より高いレベルの医療を提供するために

他科や地域の医療機関との緊密な連携を大切にし、ありふれた疾患から専門性の高い疾患、さらには救急疾患まで、すべての眼科領域における専門的かつ最新の医療を提供することができる、地域の拠点病院を目指しています。



診療スタッフ・規模

2023年度のスタッフは、常勤医6名（うち専攻医1名）、視能訓練士5名です。入院ベッドは14床、日帰り手術用ベッドは8床あり、手術日は月・木曜日の終日と水曜日の午前です。1日あたりの外来患者数は、月・木は80名、火150名、水・金は100名程度です。

診療内容

2022年度の年間手術件数は1,517件、うち白内障手術1,201件、網膜・硝子体手術128件、緑内障手術46件、その他斜視手術、眼瞼手術などを施行しました。2020年度より、緑内障に対するレーザー治療（マイクロパルス毛様体光凝固術）を開始し、適応を拡大しています（2022年度は33件）。角膜疾患、網膜・硝子体疾患、緑内障疾患は得意分野であり、最先端のレベルの高い診療を提供しています。2023年度より隔月第3週木曜午前に眼形成専門医による手術も行っています。

地域連携、学会活動、その他

地域の診療所や病院との密接な連携の元に相互紹介を行い地域一体となった診療を目指しています。国内・海外問わず眼科の主要な学会には積極的に参加し、演題発表も行い知識のアップデートに努めています。

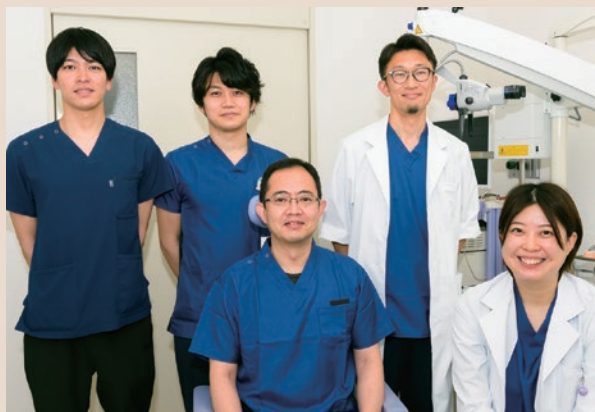


耳鼻いんこう科

Dept. of Otolaryngology, Head and Neck Surgery

中耳炎から 頭頸部癌まで

当科では手術加療を中心に行っています。取り扱う疾患は耳鼻いんこう科・頭頸部外科領域全般であり、手術は鼓室形成術から頭頸部癌に及んでいます。



診療スタッフ・規模

当科は部長以下5名で診療を行っています。外来は平日午前中のみおこなっています。当科に割り当てられた入院ベット数は16床です。

診療内容

手術室での手術件数は、2022年度は365件でした。

専攻医には主治医をしていただき、担当の患者（執刀医もしくは第一助手として）はもちろん、担当外の患者の手術（第一助手として）にも積極的に参加してもらいます。

研修医にもほぼ全例の手術に参加してもらいます。

地域連携、学会活動、その他

地方部会、全国学会には積極的に発表、参加をしてもらいます。論文は各自年間1本以上を作成することを指導しています。



歯科口腔外科

Dept. of Oral and Maxillofacial Surgery

地域中核病院の 歯科口腔外科として 総合病院内の 歯科口腔外科として

一般開業医・歯科医院では対応困難な疾患、口腔外科的な治療を必要とする患者さんをご紹介します。



診療スタッフ・規模

常勤：歯科医師3名、歯科衛生士3名

非常勤：歯科医師2名、歯科衛生士1名

診療内容

口腔外科的疾患、口腔内科的疾患、周術期等口腔機能管理など、幅広く対応しています。

対象疾患は、智歯周囲炎（親知らず抜歯）、歯性感染症、嚢胞性疾患、良性腫瘍、顎顔面領域の外傷、顎関節疾患、舌痛症、口腔乾燥症、口腔粘膜疾患などです。

循環器疾患・糖尿病・腎疾患など全身疾患を有し、一般歯科診療所では困難な抜歯などの観血的治療を、医科と連携して診療しています。

がん治療を受けておられる患者様、整形外科手術・脳卒中に対する手術・造血幹細胞移植などの治療を受けておられる患者様、緩和ケアを受けておられる患者様などに対して、周術期等口腔機能管理を行っております。

その他、睡眠時無呼吸症候群の治療用口腔内装置などの作製をしています。

またチーム医療として、NST（栄養サポートチーム）および緩和ケアチームの一員としても活動しています。

地域連携、学会活動、その他

日本口腔外科学会の准研修施設になっています。

また地域の医師会や歯科医師会の先生を対象に、京都市立病院みぶ病診連携カンファレンスの開催をしています。

非侵襲的に体内を 映像化し、 病気を診断・治療する

画像診断機器・診断技術の発展は目覚ましく、画像診断はあらゆる医療分野において役立っています。画像診断から非侵襲的治療まで幅広い診療内容を担当し、最先端の技術を用いて各診療科を総合的にサポートしています。



診療スタッフ・規模

スタッフは、常勤専門医10名、医員2名、専攻医1名です。CT3台、MRI2台、RI (PET/CT、SPECT/CT各1台)のほか、US、血管造影/IVR、消化管造影検査などを実施しています。13セットを超える本格的画像診断端末(PACS)を設置し、当科所属者のみならず前期研修医や他科医師も、読影作業を行えるようにしています。

診療内容

上記の各種機器を駆使し、必要な検査やIVR手技を適切に行えるようにしています。また、この他にも院内発生の特純X線写真(胸腹部、骨、マンモグラフィなど)も読影しています。各モダリティの読影とIVRは平日日中のみならず、休日や夜間においても、必要があればオンコールで対応できるようにしています。

当院で実施されている人間ドック症例についても、脳MRI、肺CT、PET/CTなどを担当し、読影を行っています。

地域連携、学会活動、その他

地域の診療所などからの検査と画像診断の依頼にも対応しています。また連携する病院の画像については一部遠隔画像診断で対応しています。

警察からの依頼によるAi(オートブシーイメージング)の依頼についても受け付けています。

地域での症例検討会や地域レベルでの学会にも積極的に参加しています。

目に見えぬ“光のメス” でがん病巣を殲滅する

放射線治療専門医、医学物理士、放射線治療品質管理士が、外照射、内照射、内用照射を適切・精密に用い、QOLを重視した低侵襲で先端的、包括的放射線治療を行っています。

2009年度に高性能リニアックに更新し、脳・体幹部の定位照射（いわゆるピンポイント照射）や前立腺癌等のIMRT（強度変調放射線治療）、VMAT（強度変調回転放射線治療）を行ってきました。2013年度には最新のリニアックを増設、2018年度は既設リニアックの大規模改修を行い、治療の充実を図っています。

また府下に4台しかない高線量率(HDR)小線源治療装置を有し、積極的にHDR腔内照射療法やHDR組織内照射療法を行っています。



診療スタッフ・規模

スタッフは、常勤医3名（放射線治療専門医2名）、医学物理士2名、放射線技師5名、看護師3名（がん放射線療法認定看護師1名）、クラーク2名です。入院での放射線治療は、疾患の該当診療科が入院を担当し、充実した協力体制の下、施行しています。

診療内容

リニアックによる外照射療法以外に、特殊放射線治療として、CTやMRIを活用した画像誘導HDR腔内照射療法、HDR組織内照射療法、ラジウムの内用療法、骨髄移植前の全身照射療法等を行っています。

診療実績

	2020年	2021年	2022年
治療患者	407	471	500
腔内・組織内照射	11	21	31
定位照射	21	28	28
IMRT	68	89	93

地域連携、学会活動、その他

特殊放射線治療に関しては、府内外の中核病院や、がん診療連携拠点病院からの紹介も受けています。

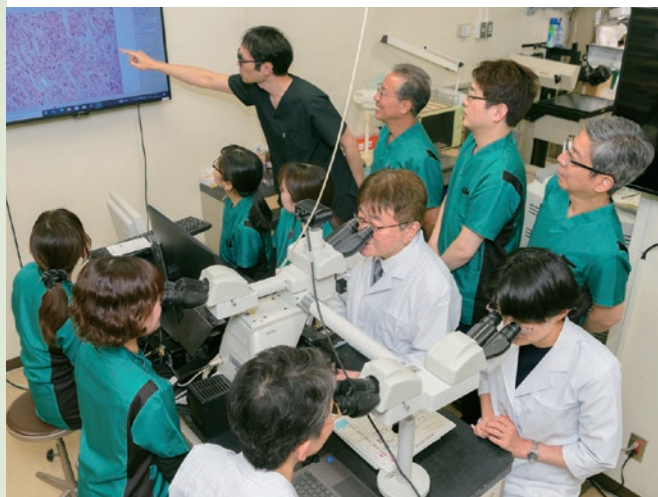
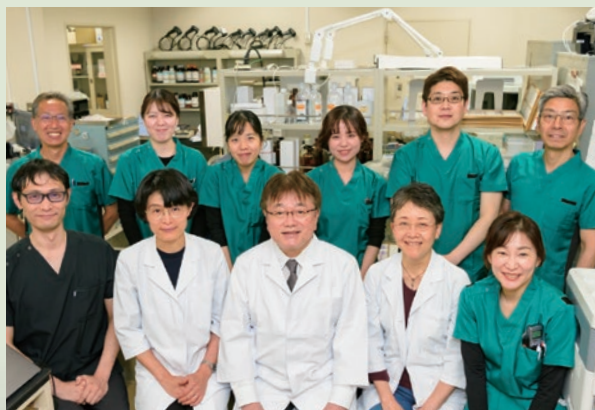


病理診断科

Dept. of Diagnostic Pathology

病理診断科とは

病院における病理医の役割は、的確な病理診断を行うことにより、患者さんに適切な治療を施行できるよう貢献することです。そのために、通常染色標本だけでなく、特殊染色や免疫組織化学、in situ hybridizationなどの手法も用いて、治療法の選択や予後の判断に関する情報を提供し、患者さんに対する診療の一翼を担っています。



診療スタッフ・規模

常勤の病理医3名（2名は日本病理学会病理専門医研修指導医・日本臨床細胞学会細胞診専門医教育研修指導医、日本病理学会病理専門医研修指導医・日本臨床細胞学会細胞診専門医、1名は専攻医）と非常勤の病理医4名（日本病理学会病理専門医研修指導医・日本臨床細胞学会細胞診専門医教育研修指導医）で、病理診断を行っています。細胞診については、5名の細胞検査士の協力を得て実施しています。

診療内容

2022年の診療実績は、病理組織診断6,236件（うち術中迅速凍結標本診断227件）、細胞診7,347件で、病理解剖は2症例でした。

地域連携、学会活動、その他

日本病理学会や日本臨床細胞学会の総会や地方会に参加し、発表したり企画したりしています。また、わが国のリーダーとして活躍する他臨床科医らとともに、いくつかの研究会の運営を行っています。



救急科

Dept. of Emergency Medicine

幅広く救急患者に対応しています

京都市南西部の中核病院として、地域の救急診療を担っています。特定の分野に偏らず、あらゆる救急患者を受け入れています。豊富な症例を通じて研修医の先生にはオールラウンドな臨床能力を身につけてもらうこと、そして地域の救急医療を担う若手医師が育ってくれることを目標にしています。



診療スタッフ・規模

救急科専門医(専従)、初期研修医3名前後でER型初期診療から重症救急受け入れまで行っています。夜間休日は各科協力のもと運営しています。

診療内容

2022年度の救急車受け入れ台数は6,423台、患者受け入れ件数は15,439件でした。小児から高齢者、内・外因問わず広く初期診療対応しています。

地域連携、学会活動、その他

救急車搬送以外にも、「地域を支援する病院」「地域のER」をモットーに、診療所、病院を問わず紹介患者を積極的に受け入れています。救急科単独では微力ですが、病院主催で地域医療従事者を対象としたものも含め各種研修会を開催しています。研修医教育も含め、年間10演題以上を合言葉として、救急医学会を中心に発表しています。



緩和ケア科

Dept. of Palliative Care

がん治療と緩和ケアの融合で、患者さんに寄り添える医療者に

2006年4月に緩和ケアチームが設立し、2013年4月に緩和ケア科と緩和ケア病床が創設され、2020年1月より緩和ケア病棟がオープンしました。現在は、日本人の3人に2人ががんにかかり、2人に1人ががんで亡くなる時代です。緩和ケアは、重い病の診断時から治療中、終末期とさまざまな場面で提供できます。緩和ケア科は患者さんの心や体の痛み、その他のつらさを和らげる治療とケアを行い、大切な時間を自分らしく過ごせるように、また、家族も含めて支えていくことを目指しています。



診療スタッフ・規模

常勤職員4名(医師3名(うち1名は兼任)、
臨床心理士/公認心理師1名)
入院ベッド14床
外来：症状緩和外来 週2日
緩和ケア病棟入院相談外来 週4日

診療内容

【緩和ケア外来】 症状緩和目的と、緩和ケア病棟入院相談の外来があります。入院時に緩和ケアチーム介入していた患者さんの退院後も継続して診察します。

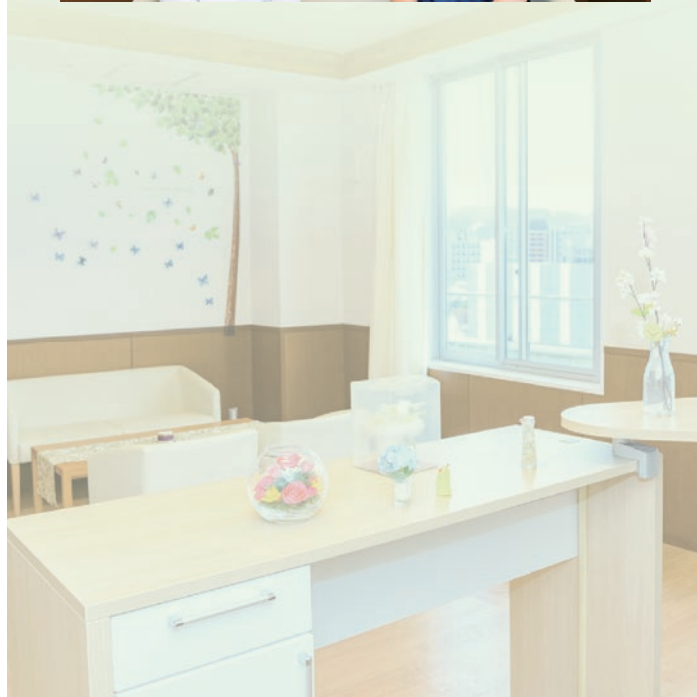
【緩和ケアチーム】 一般病棟に入院中、苦痛が強い場合には治療科医師からの紹介をもとに緩和ケアについて専門的に学んだ医療スタッフ(医師、看護師、薬剤師、栄養士、医療ソーシャルワーカー、臨床心理士/公認心理師など)が病室を訪問し、対応します。主治医や各病棟スタッフと情報共有し、医学的な側面に限らず、看護、在宅への連携、心理面や患者の意思決定支援(アドバンス・ケア・プランニング:ACP)など様々な場面で幅広い対応を行っています。

【緩和ケア病棟】 腫瘍そのものに対する積極的な治療(化学療法、手術療法など)は行いませんが、毎日、病棟スタッフとカンファレンスし、患者さんの日々の状態に応じて、つらさを和らげる治療とケアを提供しています。コロナ禍では一般病棟は面会禁止ですが、緩和ケア病棟においては短時間ではありますが、面会は可能です。入院後、状態が落ち着いている場合は在宅療養に繋げることもあり、地域との連携の強化を図っています。

地域連携、学会活動、その他

院外に開かれた緩和ケア研修会や外部講師を招いた講演会を開催し、地域での包括的な緩和ケアを推進しています。

・日本緩和医療学会認定研修施設



病院案内図

本 館			北 館		
	C ゾーン	D ゾーン	A ゾーン	B ゾーン	
屋上	ヘリポート				屋上
7 階	病棟 (耳鼻いんこう科、 眼科、皮膚科、 脳神経内科)	病棟 (呼吸器内科、 呼吸器外科)	会議室	ホール 1・2 ・ サロン	7 階
6 階	病棟 (消化器外科、 消化器内科)	病棟 (血液内科、泌尿器科、 腎臓内科)	病棟 (感染症科、救急科、 消化器内科)	病棟 (呼吸器内科、 感染症科)	6 階
5 階	医局	管理部門	病棟 (整形外科、 歯科口腔外科)	病棟 (血液内科、 緩和ケア)	5 階
4 階	図書病歴室	健診センター 医療安全推進室	病棟 (小児科) NICU・GCU	病棟 (産・婦人科、女性科)	4 階
3 階	病棟 (休床中) 血液浄化センター 治験管理室	病棟 (脳神経外科、脳神経内科、 救急科、内分泌内科) 脳卒中センター HCU 手術センター	病棟 (循環器内科、 糖尿病代謝内科、 皮膚科) 心血管撮影室	手術セン ター ICU・CCU	3 階
2 階	産婦人科 皮膚科 形成外科 耳鼻いんこう科 脳神経内科 脳神経外科	呼吸器内科 呼吸器外科 小児科 眼科 歯科口腔外科 精神神経科	消化器センター (消化器内科 ・ 消化器外科) 外科 乳腺外科 小児外科 化学療法センター エコーセンター 内視鏡センター	内分泌内科 糖尿病代謝内科 栄養指導室 リハビリテーション センター 情報コーナー 売店 コーヒーショップ レストラン	2 階
1 階	総合案内 総合内科 循環器内科 腎臓内科 感染症科 血液内科 整形外科 泌尿器科 コメディカル外来 疼痛外来	総合受付 会計・薬局 総合相談窓口 がん相談支援センター 医療安全相談窓口 患者支援センター 理容室	放射線治療科 RI PET-CT	救急・時間外受付 1B病棟 防災セン ター 警備室	1 階
地階	管理部門	管理部門	管理部門	栄養科	地階



地方独立行政法人 京都市立病院機構

京都市立病院

〒604-8845 京都市中京区壬生東高田町1-2

TEL 075-311-5311 FAX 075-321-6025

<https://www.kch-org.jp/>

編集者 京都市立病院・研修管理委員会

発行年月日 2023年 6月

